



食料備蓄と防災訓練の実施 緊急介護のシステム導入を

自主ボランティアとして、岩手県大船渡市と陸前高田市へ物資を運びました。被災した福祉施設からのSOSに、何か力になりたいと思っています。

3月20日、車に食料品、生活用品、下着などの物資を詰め込んで、夫(徹さん)と施設職員の4人で熊本を出発しました。途中、名神高速道路に入ると対向車は緊急車両が長蛇の列。日本の危機を感じました。

3月22日夕方、大船渡市にある知人の福祉施設に到着。翌日から、物資の仕分けと運搬、介護の補助、被災状況の把握などを手伝えました。

現地では行政が被災して、情報伝達機能を失っていました。避難所に十分な物資が届かない状況と、ボランティア不足で混

乱していました。

小規模な福祉施設にも大勢の人が避難していました。施設の規模に関わらず、食料の備蓄が必要だと感じました。

大規模な災害では、行政だけですべての人を助けることは困難といえます。そのために地域の協力体制を整えておくことが大切です。特に高齢者や障害者の避難を想定した防災訓練の実施が効果的だと思います。

いざ災害が発生すると、保健師や看護師の緊急医療派遣はありますが、緊急介護はありません。震災で、せつかく助かった高齢者が低体温症で亡くなられたことも聞いています。高齢者や介護利用者が増えている状況からも、緊急介護のあり方を見直すことが求められます。

Voice 1

ボランティアで岩手県大船渡市と陸前高田市へ向かった介護事業を営む高橋恵子さん(滝川・46)



1600^キの被災地へ出動 熊本県隊車両へ祈りの合掌

大震災の直後、消防庁長官から被災地派遣の可能性が上益城消防本部に伝えられ、いつでも出動できるように、派遣会議、食料や衣類などの準備を進めました。

3月14日に、県内13消防本部に緊急消防救助隊派遣要請の一報が入りました。上益城消防本部から第一次派遣隊9人が、ポンプ車と人員搬送車、資機材搬送車に搭乗して出発。熊本県隊106人と車両32台が集結して、1600^キ先の仙台市泉消防署へと向かいました。

活動1日目の3月17日は、仙台市若林区の海岸近くで行方不明者の捜索にあたりました。住宅と田園が広がっていた場所には、津波の爪跡が残る、がれき

Voice 2

緊急消防援助隊派遣で宮城県仙台市へ向かった上益城消防署第3小隊長清水勝幸消防司令(小坂・56)



3_熊本県隊が捜索活動を行った宮城県仙台市若林区の海岸から2^キ付近。津波被害を受けて住宅と農地は海水につかった光景が広がっている 4_横一列に隊列を組んで、がれきや泥の中を懸命に捜索活動する熊本県隊 (写真/高橋恵子さん、上益城消防署提供)

1_七海中央小児童が作った応援メッセージを東北に届けた高橋恵子さん・明日香さん親子。「とうほくのおともだちへ みんなでおうえんしています」と書かれている 2_がれきの中に立てられた「がんばろう大船渡」のメッセージボード。被災地の復興へ向けた願いが込められている

非常訓練や防災意識が重要 復興を確信ガンバレ東松島

県内自治体から派遣で被災地の復興支援に従事した税務課徴収係 福田拓馬主事(左・31) 企画財政課企業誘致係 島田誠也主査(右・39)

Voice 3



熊本県は震災後、被災地への人的派遣を決め、自治体職員へ募集を呼びかけました。本町からは、第7陣に福田拓馬主事が、第10陣に島田誠也主査が志願。チーム熊本の一員として、宮城県東松島市へ向かいました。派遣期間は7日間。活動は▼物資の搬入搬出▼家屋調査や避難所巡回の補助▼生活再建支援・住宅応急修理・災害義援金などの申請受付などの業務に従事しました。

現地での活動を通して二人は次のように振り返ります。「日頃からの非常訓練や防災意識こそが、被災地で生死を分けた大きな要因の一つだと感じました。御船町も過去に大水害を経験しています。『災害は忘れた頃にやってくる』という言葉がありますが、災害発生時にどう動けるのが命をつなぐ懸け橋になると思います。日頃の訓練の重要性を心から痛感しました」(福田談)

つながり、広がる、東日本大震災への支援の輪

今、私にできること

Proud! Japan
東日本大震災の復興を支援しよう

3月11日、宮城県三陸沖を震源に未曾有の被害をもたらした東日本大震災。震災発生後、日本全国、そして世界各国から多く人が被災地へと向かい、懸命な救助活動や復興支援などが行われています。ここでは、御船町から東北へ向かった4人に現地での活動を伺いました。

